

子どものチック症状改善と母親の子どもに対する 気持ちの変化過程に関する一考察

——チックを主訴に来談した母子の並行面接経過を通して——

財 満 義 輝

(受付 2003 年 5 月 12 日)

I はじめに

筆者は大学で教鞭を取る傍ら、研究のフィールドとして学校現場や小児科外来でカウンセリングを行っている。その際、対象のクライアントの年齢が低く、言語化できない場合、親とりわけ母親が面接の対象となる。小児科外来において、子どもに対しては、遊戯療法や行動療法的アプローチを親面接と並行して行っている。子どものチック治療に関する研究は、松本（1987）、森谷（1990）をはじめ多くみられるが、親面接における治療過程に焦点を当てた研究は、内田（1992）、小野（1993）以降数少ないようである。親面接において、子どもの状況を聞き子どもへの対応を一緒に考えていると、親の子どもに対する理解と対応が面接経過の中で変化していることに気づかされる。また、そうした親の変化が子どもに影響したり、卯月（2002）が面接経過の中で子どもだけが成長変容するわけではなく、親自身にも同様の変化が生じていると述べているように、子どもの変化が親にも影響するという相互作用がみられる。従って、親の子どもに対する理解や対応の変化過程を提示することは、子どもの変化の予測や治療に見通しを持つことが可能となろう。また、このことは親面接担当の治療者にとって、親面接の方針を立てる際にも役立てるように思われる。

チック症状を訴える子どもの親は、学校以外の場所でも他の親や子どもたちからチック特有の突発的なまばたき、肩をすくめる、しかめ顔などの症状のことを言われることが多く、不快感と不安が募っている。また、わが子が傷ついていることも知っている場合が多く、親としては何とかわが子を守りたいという気持ちが強いと言われている（高野ら、1996）。こうした親に対しては、子どもに緊張を高めないように、「叱らない」「注意しない」「話題にしない」などを守ってもらい、子どもを受容し、ストレスの軽減や自己評価を高めるための言葉かけや環境調整を工夫してもらうことが大切だとされている（二宮、1999）。また、親への援助や面接のあり方として、松栄ら（1994）は、子どもの問題によって生じる母親の不

安や葛藤の処理を援助するような自我支持的な態度が望まれると述べている。卯月（2002）は、子どもの問題であっても親の不安や面接への動機付け、家族の全体のあり方などを考慮しながら親面接を進めることの大切さを述べている。

こうした治療者側の親への姿勢が親の子どもへの気持ちにどのように反映されるであろうか。内田（1992）は、不登校の治療において、親の子どもに対する期待が思い通りにいかない場合の苛立ちや混乱を、親がいかに受け止め、体験していくかが、不登校の親への治療において重要なポイントになってくると述べている。また、小野（1993）は、不登校児の親のグループへの支援の経過で、不安・混乱期から親の成長期までの8段階の変化過程仮説を述べている。これは不登校の子どもの親に限ったことではないように思われる。子どもが何らかの症状を訴えたり、問題行動を呈したりすれば、多くの親は混乱し自身の子育てについて見つめ直すものである。親がわが子の問題を親自身の問題として気づき、捉えることで、子どもは親からの呪縛から解放され、安心感の中で、症状が改善していくように思われる。

そこで、本稿では、チック症状を主訴に母親とともに来談したS君のチック症状改善の背景と、母親自身がわが子の子育ての問題に向かい合い、チック症状を含めわが子を積極的に受容するまでの過程について、内田（1992）や小野ら（1993）の成果とを対応させ検討してみた。

II 症例の概要

症児 小学校1年生の男児，S君。

主訴

チック。次の動作に移るとき、眼球を反転させる。手足を広げたり、顎を上げたりする。

家族

父親は30歳でサラリーマン。中肉中背で、一見大人しそう。母親も30歳。小柄で、よく喋られ、はっきりものを言う。S君は、舌っ足らずな感じで話をする元気いっぱいの子。妹は5歳、弟は3歳である。

生育歴

出産時2985グラム。手がかからず、育てやすかった。ファミコンは2歳前からやっていて得意。弟が生まれて、妹の甘え方を真似て甘えられるようになった。2年保育で幼稚園に入った。友だちをつくるのが下手で、友だちとの関係はぎくしゃくしていた。甘えるのは下手であった。

現病歴

チックは、小学校入学して10日から2週間くらい経ってわかった。家では、ファミコンを始めようとしたり、次の動作に移ろうとしたときに儀式のようにチックがあった。歩いているときも、手を広げるなどチックがあった。X年5月にはいって眼球を斜めに動かすため、

T 病院小児科に受診。次回より外来カウンセリングを開始することにした。

治療方針

- 1) チックについては、見守り、自然消滅をはかる。
- 2) 学校に対しては、チックによるいじめがないように配慮を要請する。
- 3) S 君に対しては遊戯療法を、母親に対しては受容的支持的なカウンセリングを行う。
- 4) 家庭では S 君を受容し、甘えを引き出す。
- 5) S 君の攻撃性や葛藤を遊戯療法場面で出させる。

治療構造

月 1～2 回、1 回 40 分程度の母子並行面接を行う。母親の面接は、筆者 Co (a)、子どもの遊戯療法は、女性スタッフ Co (b) が担当することにした。

III 母子並行面接経過

S 君の発言を「 」、Co (a) の発言を〈 〉、感想を《 》で示す。＃は面接の回を示す。

＃1：症状報告（X 年 5 月 14 日）

（母親面接）

父親，母親，そして S 君が来談。〈S 君はこの病院にどうして来ているか知っている〉。「目がパチパチするから」。〈どうしてパチパチするの〉。「女の子に叩かれた」。小学校に入って 10 日から 2 週間くらい経ってわかった。参観日に行くと目がきょろきょろしていた。家では手を挙げ、顎を突き上げ、口を横に広げる。次の動作に移るときに見られる。歩いているときもあり、人前でされると嫌な感じ。これはチックですか。〈そうだと思います〉。やっぱりそうですか。学校の先生は家庭訪問に来られるまで気づいておられなかった。担任の先生や友だちとの関係がぎくしゃくしている。友だちを作るのが苦手。これまで手がかからなかった。妹が生まれてから、甘えるようになった。

（子どもの様子）

箱庭の砂を「砂糖みたい」と触る。子どもを背負った左側の母ゴリラと右のもう一匹のゴリラとを戦わせる。左側にトラなどの動物や蛇，ムカデを置き，右側に砂を掘りその上に橋を掛け，橋の下にイルカを置く。病院を見つけ「〇〇病院」と言いながら上側に置き，病院の上に飛行機を 2 機載せる。その病院の後ろに学校を置く。ふいに，「キラキラ，僕好きなんだ」と言いながら金色に光る五重塔，エッフェル塔を右下に，大仏を左上に置く。並べた動物の間に，仕上げるように木々を置き，「林になった」と言う。下には戦車を置く（図 1 を参照）。その後，工作をする。



図1 第1セッションの時の箱庭作品

#2：原因探し（X年5月28日）

（母親面接）

母親，S君そして弟が来談。弟が母親の膝元で甘えているのを見て，S君は身動きができなくなる。「お腹を蹴られて痛い。やったのは〇〇君。やられたら，やり返す」。S君は母親と弟を気にしながらプレイルームに行く。最近では，怒らないようにしている。妹を噛んだり，髪を引っ張ったりしだした。昨日も学校から帰ると，手を広げ，目をぐるぐる回した。しばらくすると落ち着いた。近所の知り合いにSの症状を知っておいてもらいたかったので，知らせている。主人は，これまで仕事で忙しかったためにあまり遊べなかったもので，これからはSと遊んでやろうと言っている。学校には先週本人の症状とそれによるいじめに遭わないよう連絡をした。治るんでしょうか。

《S君の治療に来ており，母親としてはCo(a)に話すことはあまりないという感じ》。

（子どもの様子）

母親と弟を気にしながらプレイルームに行く。箱庭を行う。タコ，ヒトデ，カニ，コイ，サソリをビニール袋から出し，両手で箱庭の砂と混ぜ合わせる。コイは全部集めて，右側の小さい池に向かい合わせるように置き，「お話している」と言う。サソリは何度も埋められ，

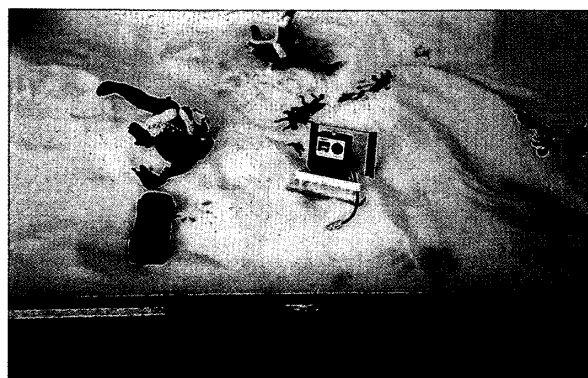


図2 第2セッションの時の箱庭作品

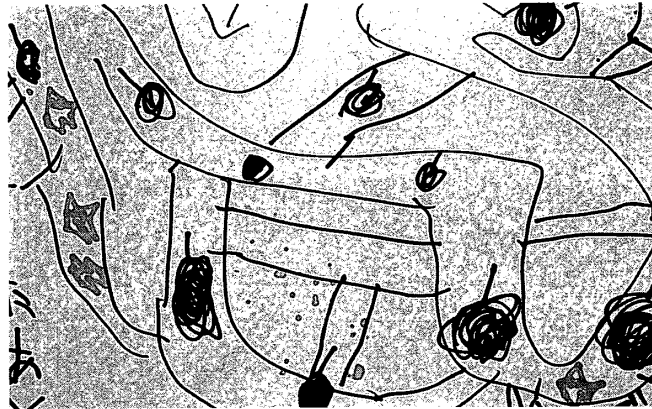


図3 第2セッションの時の描画

また生き返る。サメやキャプテンクックを見つけ上側に置く。チンパンジーの親子を、一度砂の上に置くが、少しも見えないように砂で埋め、砂山を作る。ガソリンスタンドを発見し、メーターの動かし方を教えてもらい、真ん中に置く。車が最後に登場し、砂山にぶつかって、もぐったり出たりする（図2を参照）。その後、画用紙に爆弾だらけの迷路を描く（図3を参照）。

#3：苛立ち（X年6月25日）

（母親面接）

母親，S君，そして弟が来談。2人で交互に母親に甘える。〈学校はどう〉。「辛い。押されたり，サルと言われたりする」。手を広げることは変わらないが，自分の気持ちを出しだした。きちんとしなさいと言うと，わざとダラッとする。弟が「お兄ちゃんのところ（病院）へ行く」とダダをこねだした。Sには，そういったダダをこねることはなかったし，育てやすかった。5月初旬の参観日に学校に行き，Sの目を見て吐き気がした。自分の子じゃない感じ。チックが1つくらいになればいいんですが，3つも4つもあると大変。参観日の後，どこかに相談に行こうと思ってここに来た。小児科の先生にチックと言われて，やっぱりと思った。時間がかかるんでしょうね。

《S君のチックを認めてやりたいが，認められない自分に苛立ちを感じている。わが子がこうしたチックを患うことに対して，かわいそうというより格好悪い，体裁が悪いという感じ》。

（子どもの様子）

箱庭を行う。持参したキョロちゃんと箱を砂の上に置く。こん棒を持った兵士を手前に置くが，大波に埋められる。次に描画で迷路を描く。今回はゴールが見え，爆弾も少なかった（図4を参照）。

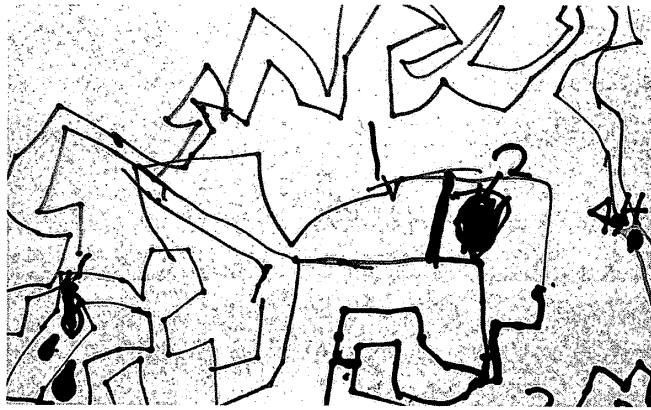


図4 第3セッションの時の描画

#4：積極的関与（X年7月23日）

（母親面接）

この1ヶ月は（チックが）激しかった。歩く度に手を広げたり、自転車に乗っていても、目をつぶったりした。学校でつまずいたり、物を落としたりもした。夏休みは長いからリラックスさせてやりたい。〈何をしたい〉とS君に尋ねると、「虫を集めたい。花火をしたい」と言う。

（子どもの様子）

箱庭を行う。砂の上で赤色と青色の2体の人形を戦わせる。さらに、2体を両手に持って交互にぶつけて攻撃し合う。やられた方は倒れるが、すぐに立ち上がり反撃する。その後、青色の人形が海の中に落ちてしまい、ヘビ、ゴキブリ、ネズミ、クモに囲まれてしまう。青色の人形と赤色の人形を右下に置き、海の中にいた気持ち悪い動物は殺され、イルカとクジラだけが残る。鳥居を右上に置き、中央上に金魚だけを集め、「お祭り、お祭りじゃけえ、金魚すくい」と言い、その金魚の横にも橋を架ける（図5を参照）。その後、迷路を4枚描く。



図5 第4セッションの箱庭作品

キャンセル（X 年 8 月 27 日：母親が忘れていた）

#5：症状受容（X 年 9 月 10 日）

（母親面接）

夏休みはいい感じだった。手を広げる回数は減った。学校に行きだして、まばたきが出てきた。運動会があるから緊張しているのかなと思う。しかし、もう気にならなくなった。どれくらいで治るかと思っていたが、気にならなくなった。近所にも同じような子がいる。そういえば家で迷路は描かなくなった。

《余裕が感じられる》。

（子どもの様子）

持参したポケモンの人形を箱庭の砂に埋め、上から叩いたり、踏みつぶしたりして殺す。その後、ポケモンは復活してくる。「次はお絵描き」と言って、塗り絵のドナルドにおしおきをする。迷路を 3 枚描く。その内の 1 枚には人物らしい人も登場する（図 6 を参照）。迷路が簡単になりゴールまでたどり着くことができる。

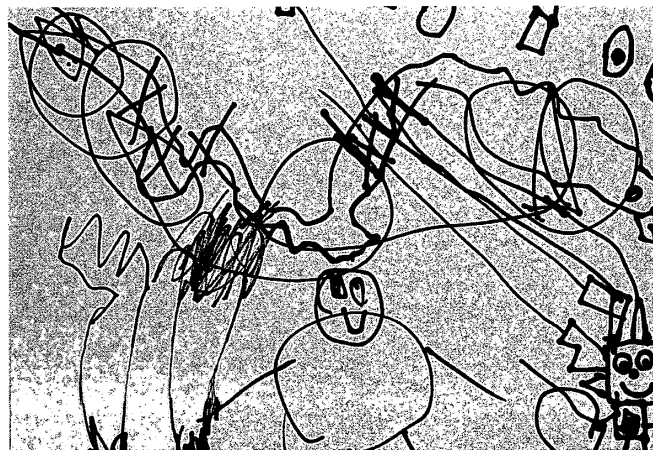


図 6 第 5 セッションの時の描画

#6：自身への気づき（X 年 10 月 22 日）

（母親面接）

新しいことをする前に、まだ手を広げることがある。6 連発出たこともあった。運動会の体操で手を広げる場面があり、主人は S の得意な体操じゃと言ったりもできるようになった。今日は弟を実家に預けてきた。以前は、突如として弟に当たっていたが、最近はない。他のお母さんの相談にのった話題。やはり親が変わらないとダメですね。私が変わったんですね。私にとって必要だったんですね。〈少々の間違い、失敗を大らかに受け止めてもらいたい。何かありましたら、また来てください〉。

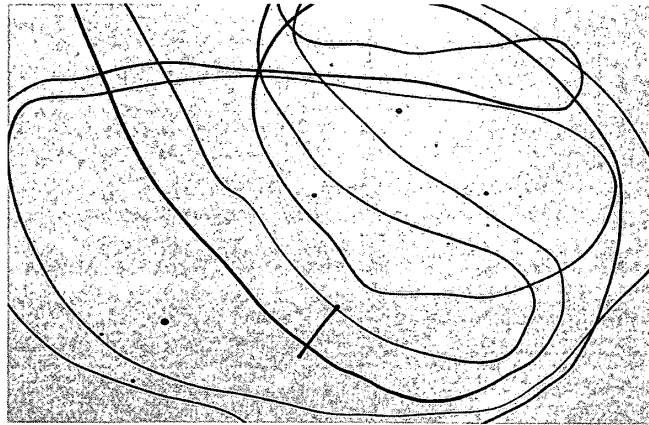


図7 第6セッションの時の描画

《母親はゆったりとして明るい表情。母親らしさが出てきた感じ》。

(子どもの様子)

「ポケモンの町をつくろう」と持参したポケモンを箱庭に置く。ピカチュウの親子（お母さんと赤ちゃん）とプリンちゃんだけを残して、後は「みんな吸い込まれた」と言って砂と混ぜる。描画に描かれた迷路では入口、出口が多くなり、爆弾や障害物がなくなる（図7を参照）。ミッキーの塗り絵に時間をかけて取り組む。Co（b）と一緒に6枚の絵を描く。

IV 考察

1. S君の症状改善の背景

当初、母親はS君のチック症状をなかなか受け止めることができず、世間体を気にしていた。また、S君の治療だけに来ているという感じであった。S君は3人兄弟の第一子であり、下に1歳4ヶ月離れた妹と3歳離れた弟がいた。S君は妹の甘え方を見て母親に甘えだしたが、それまでは手がかからず育てやすかったようであった。学校では、名前からいじめを受けやすいこともあった。こうしたことから、S君は同胞葛藤を抑圧し、母親に対して手のかからぬ良い子を演じてきたものと思われた。母親がS君の甘えやチック症状をも含めて受け入れられること、さらには親が学校に対して、チック症状や名前でいじめに遭わないよう申し出ることなどの必要性を感じた。そこで、母親に対しては、筆者が受容的支持的なカウンセリングを、また、S君に対しては、女性セラピストが遊戯療法を行った。

S君は遊戯療法の経過の中で箱庭や描画を行った。箱庭では#1で子どもを背負った母ゴリラを戦わせ、#2ではチンパンジーの親子を砂に埋めたりした。こうした行為は、母親と下の子に対する嫉妬を表現しているように感じられた。また、#4では人形同士を戦わせた。#5ではポケモン人形を砂に埋めてその上から叩くなど様々な攻撃性を出した。竹松

(1994) が、チック症状を訴える子どもの中には、とぼけたり、物真似や踊りなどでおどけたり、反対に、適応的な良い子となって、自由な感情表現ができない子どもがいると述べているように、S 君は後者の適応的な良い子を演じてきたものと思われる。そうした彼が、箱庭の中に攻撃性を出せたことは、抑圧された感情の放出という点で意味があったように思われる。また、描画に表現された迷路では、当初は行き止まりや爆弾が多く、行き先を遮っていたが、後半では行き先をふさぐ障害物を S 君なりのやり方で爆破したり、近道をしたり、跳び越えたりして、出口にたどり着くことができるようになった。さらには、描画に人物が登場し、描画そのものが穏やかなものになった。子どもの絵には、無意識の願望や恐れを象徴的形式で訴えたり表現したりするかも知れないと言われている (Thomas, etc, 1996; 香川ら, 1997)。S 君の描画で表現された迷路は、まさに S 君の内的世界であり、その迷路に仕掛けられた爆弾は、S 君の思い通りにならない気持ちや先に進めない不安な気持ちの表現だったのではなかろうか。しかし、#2 頃から父親は、S 君に積極的にかかわろうとしたり、母親は叱らないようにしたり、さらには、チック症状のことやそれによるいじめがないように学校に申し出たりした。S 君は #2 では母親と弟の間に割り込めなかったが、#3 では弟と交互に母親に甘えることができるようになっていた。そして、#5 の頃には、母親は S 君のチック症状を気にしなくなった様であった。こうした家庭における受容的雰囲気や学校でのいじめの解消などにより、S 君のチック症状は次第に軽減していった。#6 の箱庭では、ピカチューの親子とプリンちゃんを残して、後は砂の中に吸い込まれたと表現した。このことは母親と他の兄弟との関係を、S 君なりに受け入れられるようになったことを示していると思われる。それは S 君自身が経過の中で、母親から十分に受容されているという実感が得られてきたからであろう。また、この頃には、母親にゆとりと明るさが見られるようになった。運動会の体操で手を広げる場面において、父親の「S の得意な体操じゃ」との発言は、チック症状が日常生活の中で機知に富んだ表現で受け入れられるようになった証しであるように思われる。S 君のチック症状は、家庭では多少見られるものの、遊戯療法場面ではまったく見られなくなった。そして、母親の「やはり親が変わらないとダメですね。私が変わったんですね。私にとって必要だったんですね」との言葉から、母親自身の S 君に対する積極的受容的態度が見られるようになったので終結に至った。

2. 母親の子どもに対する態度の変化過程

親面接をしていて感じることは、卯月 (2002) が述べているように、子どもの変化とともに、親自身にも変化が見られるということである。不登校の事例からではあるが、内田 (1992) は、親面接の過程で親の子どもに対する期待に変化が生じることを見出した。その期待の変化について、前期 (操作的期待)、中期 (期待の純化)、後期 (あきらめ) の 3 期に

分けた。前期は子どもを思い通りに動かそうとする時期であり、中期は何とか子どもを学校に行かそうとするが、子どもは頑として動かず、親自身「行き詰まり」の状態になる時期である。そして、後期はいろいろやってみるが結局どうしようもないという「あきらめ」が生じる時期である。つまり、この後期の段階で、子どもは自分なりの時間を過ごし、いろいろなことを考え始める、というものである。また、同様に小野ら（1993）は不登校児の親グループの変化過程について、I. 不安・混乱期、II. 責任回避期、III. 模索期、IV. 解決方向探索期、V. 方法探索期、VI. 変化期、VII. 問題の積極的受容期、VIII. 親自身の成長期など、8段階の変化仮説について述べている。本症例では、6セッションと短期間ながら、親の子どもに対する気持ちに変化が見られた。そこで、本症例で見られた母親の子どもに対する気持ちの変化過程と、内田（1992）の子どもに対する親の期待の変化と小野ら（1993）の親の変化過程仮説とを対比させ検討してみた（表1を参照）。

表1 母親の子どもに対する期待・態度などの変化過程の比較

内田（1992）		小野（1993）	財満
前期	操作的期待	I. 不安・混乱期 II. 責任回避期 III. 模索期	#1：症状報告 #2：原因探し #3：苛立ち
中期	期待の純化	IV. 解決方向探索期 V. 方法探索期 VI. 変化期	#4：積極的関与
後期	あきらめ	VII. 問題の積極的受容期 VIII. 親自身の成長期	#5：症状受容 #6：自身への気づき

#1では、「人前でされる（チックが出る）と嫌な感じ」と言われるように、S君の症状に対する母親のうとまじさが感じられた。連れ歩いているわが子が運動性のチック症状を呈することは、母親にとって耐えがたいものであったであろう。#2では、母親は自身の体裁の悪さを少しでも軽減しようとしてか、知り合いにS君の症状を伝えるという行動に出た。また、学校へはS君の症状によるいじめがないように、担任に連絡をしていた。このことは、二宮（1999）が「学校では友人からの批判やいじめがあるかも知れない。担任にチックの本質や経過の説明をすることは、子どもの症状の改善に役立つ」（p. 163）と述べているように、彼を取り巻く友人が、彼のチック症状を障害故の行動として理解することは、症状緩和に極めて大切なことである。まだこの段階では、「治るんでしょうか」との発言にみられるように、母親の不安は大きいように思われた。また、母親は子どもの治療のためにのみ来談しており、筆者にはあまり話すことはなく、待合室で待つ程度のもと考えられていたように思われた。#3では、S君のチック症状に気づき、当小児科に来るまでの経緯が語られた。「時間がかか

るんでしょね。私のカウンセリングに来ているみたいです」との発言から、母親自身、S君の症状を認めてやりたいが認められない自分への苛立ちが感じられた。また、母親がS君のチック症状を理解し、自分にできることを探るというより、母親自身の辛さ、しんどさ、苛立ちを受けとめてもらいたいという感じであった。内田の分類では、ここまでが前期の操作的期待、小野らの仮説では母親の不安・混乱、本人や学校への責任転嫁、さらには解決を考え始めるもののほとんど解決につながるものがないという模索期に相当しよう。

#4では、チック症状がかなり激しくなっていた。母親としては何とかしてやりたいという思いからか、また夏休みを前にした回でもあったことからか、「夏休みは長いからリラックスさせてやりたい」と、S君に対する気持ちが出てきた。夏休み後半のキャンセルは、母親が忘れてしまうほどにS君の症状が軽減していたこと、母親もS君の症状に苛つかなかったことなどが考えられる。夏休みで学校が休みということと、母親のS君に対するリラックスさせてやりたいという気持ちが功を奏したものと考えられる。この回は、あれこれと子どもに手を尽すが変わらない段階であり、内田のいう期待の純化に相当し、小野らの仮説では、この時期は本人の否定的な面をも含めた本人への現状の許容的理解ができた段階と言えるよう。

#5は、夏休み明けの回であった。学校が始まって症状が出てきたものの、「運動会があるから緊張しているのかなと思う」との発言から、母親はS君の症状を冷静に見られるとともに、「もう気にならなくなった」と語られるまでになっていた。また、周囲にも目が向けられ、「近所にも同じような子がいる」と、わが子だけではないといった余裕すら感じられた。#6では、S君の症状はまだ残りながらも、運動会の体操場面での手の動かし方を父親が「Sの得意な運動じゃ」と話すなど、S君の運動性チックを肯定的にユーモアで受けとめられるようになった。母親は他の母親の話題をする中で、前述したように親が変わることの必要性を語られるとともに、他の母親と自分を照らし合わせながら、S君の症状を自分の問題として受けとめられるようになった。#5と#6は、内田の分類では、「あきらめ」に、小野らの仮説では、まさにVII期、VIII期に相当しよう。

母親のS君に対する感情の変化過程は言葉こそ違え、内田、小野らの成果に、ほぼ準拠していた。このことは、不登校のみならずチック症状などの心身症を訴える子どもの母親についても同様のことが言えることを示唆している。母親の子どもに対する気持ちの変化過程は、子どもが示す様々な問題行動や症状の改善の指標になるように思われる。

V おわりに

母親の面接過程の中で、親の子どもに対する理解や対応の変化を知ることが、子どもの症

状改善を予測したり、治療に見通しを持ったり、また面接の方針を立てたりすることに役立つように思われる。本稿では、チック症状を主訴に来談した母子並行面接の過程から、S君のチック症状改善の背景と母親の子どもに対する気持ちの変化過程について、内田（1992）の子どもに対する親の期待の変化と小野ら（1993）の親の変化過程仮説とを対比させ検討した。

本症例は、小学校1年生のS君で、入学して間もなくチック症状が出たために小児科外来に母親とともに来談し、母子並行面接を6セッション継続して行ったものである。S君のチック症状の背景として、これまで抑圧してきた同胞葛藤や小学校という新しい環境への不適応が考えられた。チック症状が短期間で軽減した要因として、S君が不安や葛藤を描画や箱庭に投影できたことと母親のS君に対する受容的態度への変化が考えられた。母親の子どもに対する気持ちの変化過程は、内田（1992）や小野ら（1993）が述べた変化過程にほぼ準拠し、その経過から、1) 症状報告、2) 原因探し、3) 苛立ち、4) 積極的関与、5) 症状受容、6) 自身の気づきなどの変化が見られた。このことは、不登校のみならずチック症状などの心身症を訴える子どもの母親についても同様の变化過程が見られることを示唆しているものと思われる。

今後、親面接において、心身症を訴える子どもに対する母親の気持ちの変化過程についてより詳細に検討するとともに、親面接のあり方について検討を重ねたい。

〈付記〉 本論文は、第16回日本小児心身医学会で「チックを主訴に来談した母子の並行面接過程について」と題し、口頭発表したものを加筆し、まとめたものである。S君の遊戯療法でかかわっていただいた、当時、本学人文学部心理学専攻の大学院生であった米山理香さん（現在、千代田区立教育研究所の臨床心理士）に、この紙面をお借りし感謝したい。

文献

- Clyn V. Thomas and Angèle M. J. Silk An Introduction to The Psychology of Children' S Drawings 中川作
 一 監訳（1996）：子どもの描画心理学．法政大学出版局
 香川 勇，長谷川 望（1997）：子どもの絵が訴えるものとその意味．黎明書房
 松本雅彦（1987）：チック．清水将之編，今日の神経症治療．金剛出版，27-38.
 松栄明浩，松本 剛，上地安昭（1994）：チック症児との遊戯療法過程——思春期クライアントへの支持的アプローチ．精神療法，20(2)，51.
 森谷寛之（1990）：チックの心理療法．金剛出版，104-111.
 二宮恒夫（1999）：清水凡生編，小児心身医学ガイドブック．北大路書房，163.
 小野 修（1993）：不登校児の親の変化過程仮説——パーソンセンタード・アプローチ．心理臨床学研究，10(3)，17-27.
 竹松志乃（1994）：チック・強迫症状を呈した中学生男子の事例——チック症者の“仮面性”について．心理臨床学研究，239.
 高野美雪，野村芳子，瀬川昌也（1996）：チック症事例．学校メンタルヘルス実践事典，日本図書センター
 内田利広（1992）：登校拒否治療における「親の期待」に関する一考察 操作的期待—行き詰まり—あきらめ．心理臨床学研究，10(2)，28-38.
 卯月研次（2002）：遊戯療法と親面接：基本として求められること．臨床心理学．金剛出版，320-330.